

山形大工学部に「センター」新設

山形大は工学部（米沢市）に「AIデザイン教育研究推進センター」を設置し、4月からシステムの運用を始めた。同大の学生、教職員が最先端のシステムを利用できる環境を整え、人工知能（AI）を使いこなす人材の育成を進める。同大の各種研究を加速させることで、地域貢献にもつなげる。

AI人材育成に注力



新たに導入したディープラーニングシステムを説明する田中敦副センター長
＝米沢市・山形大工学部

19日の工学部長記者懇談会で概要を説明した。AIは新たなビジネスモデルの開発につながることで期待される一方、技術者が大量のデータを基に自ら学習し、高精度で判断、予測する「ディープラーニング（深層学習）」のシステム。AI技術の一つで、自動

術者は不足している。センターはこうした時代のニーズに応える。今回導入したのは、コンピュータが大量のデータ

研究加速、地域貢献 図る

運転、音声認識などにも用いられている。同大のシステムは高性能な画像処理半導体（GPU）を8枚搭載しており、通常のコンピュータの100倍以上の速度で情報を処理することが可能という。

さらに、プログラミングになじみのない人でも手軽にディープラーニングをはじめとした高度なプログラムを構築できるソフトウェア「MATLAB」を学内全体で利用できる環境を整えた。事業費は計約1億円。

とにも大学内のネットワークと連動し、全ての学生、教職員がそれぞれの研究などに合わせ、自分のスマートフォンやパソコン上から利用できる。既に大学内で講習会を行い、活用を促しているほか、授業でも取り入れている。

工学部内では▽超音波を利用した文化財探査▽米沢盆地の地震の震動予測を通じた耐震設計など、既にディープラーニングを利用した研究が行われているが、これらの研究が加速することが期待される。農学部からは「作物の生育状況の判断に利用できないか」などの問い合わせが寄せられているという。

小坂哲夫センター長は「今、大学にはAI教育を受けた人材の輩出が求められており、われわれのミッションと考えている」と話した。

（大坪千絵）